

政府・文科省が進める日本の英語教育は近年、その様相を大きく変えてきた。小学校での英語必修化から、中学校・高校の英語授業を英語でおこなうことまで、強圧的に要求されている。そこでは、「読解力や文法重視の教育は古い」として、それを「会話でのコミュニケーション力の育成」に置きかえることが時代の流れでもあるかのようになりまわってきた。

山田昇司 著

英語教育が甦えるとき

寺島メソッド・授業革命

著者は長年、高校で英語教師を務めた経験や、みずからの英語学習の過程を振り返り、また大学での英語教育の実践を踏まえて、こうした風潮が教育現場の現実からいかに遊離したものであるかをいきいきと伝えている。

本書は副題「寺島メソッド・授業革命」に見るように、英語教育研究者の寺島隆吉氏(国際教育総合文化研究所、元岐阜大学教授。先月本紙に講演録を九回連載)が提唱する英語教育法にもとづく授業を通して検証された事実を整理しまとめたもので、日本の英語教育のあり方に一石を投じるものとなっている。

だが、本書は単なる授業方法を技術的に紹介するたぐいのものではない。本書全体に据えられた視座は、英語教育を人格を陶冶し学力を育てる「人間教育」という原点に立ち戻らせることである。それは、目前の

書評

母語を耕す「人間教育」へ

大学での実践 実用、の呪縛から解放

は、日常生活において「日本人みんなが英語を使う必要はない」というあたりまえの事実を押し出している。学校の授業で英語が話せないのは当然のことで、社会に出て必要がある者は英語が使えよう勉強すれば良いだけである。英語をしゃべる必要がないことは、欧米諸国に侵略された歴史を持ち英語を話さねばならない国の人人と比べてありがたいことなのだ。

著者は自分自身、一八年間外国人と会話したことがなく、また英語で英語を教えるもったことではなかった。にもかかわらず、高校に勤めて「オール英語の授業」をめざす熱血教師となった。しかも、生徒の反発を受け授業が成り立たず挫折した経験を持つ。また、学生時代の英語学習を思い起こし、その教材からもアメリカの報道で洗脳され、一種の「英語ハカ」になっている現実にあき、衝撃を受けたことも

明らかなにしている。本書の土台をなすのは、そうした幾多の深大な体験から、英語教育についての基本的な考え方を転換して創造的な授業を生み出すなかで、「英語は大嫌い」という学生たちも含めて英語学習の意欲を発揚してきた教育実践レポートである。その著者が「ありもしない幻想でしかない」「実用性」という呪縛「からみずからを解放し、英語を学ぶことの意味をその根底から考え直すように」という、英語教師への訴えには説得力がある。

著者は、学校での英語教育の目的は「社会人になったときに活用できる基礎力をつけておく」(寺島隆吉)ことだと指摘する。その基礎力とは「語彙や熟語、会話表現の数」ではなく、文法については「名詞・動詞・名詞」という日本語と異なる英語の基本語順の習得であり、音声に関して「リズム」の体得である。語彙や単語は英語を使わなければならないものであり、基礎となる英語学習の幹を身につけておけば必要に応じて豊かにしていけるのである。

今、政府・マスメディアを通して、英語がすべての日本人に必要であるかのような「幻想」がふりまわられている。本書で

山田昇司

寺島メソッド授業革命

英語教育が甦えるとき

「英語で授業」
私はこうやって乗り越えた!

明石書店
243ページ
2500円+税

著者は、日本語ですらしっかり聞きとれない生徒がいるなかで、公立高校入試でも「日本語リスニングテスト」を導入するところが増えている現実を前に、「英語での授業」を求めることの異様